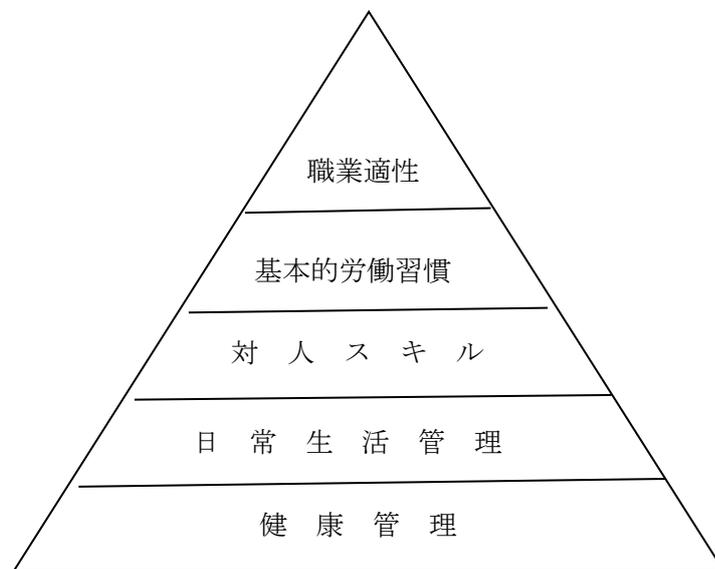


### 【就労準備性とは】

就労準備性とは働くことについての理解・生活習慣・作業遂行能力や対人関係のスキルなど働くための基礎的な能力のことである。職種・障害の有無を問わず、働く上で必要とされる力である。そして、働く、働き続けるためには「健康管理」「日常生活管理」「対人スキル」「基本的労働習慣」「職業適性」の5つの事柄に対する能力が必要となる。障がいの有無に関わらず、人が就業する上で必要とされる能力を順番に並べたものが「就労準備性ピラミッド」である。仮に適性のある職業についていたとしても、どんなに作業能力が高くてもピラミッドの底辺から順にしっかりと備わっていないと働き続けることは難しいと言われている。5項目のどこが不十分なのかはこれまでの生徒の生徒それぞれの経験により異なるが習得しなければならない5項目能力の順序が大きく入れ替わることはない。



### 【総合的な考察】

この就労準備性ピラミッドのチェックリストは生徒それぞれの個人的なものではあるが、ここでは本校の生徒全体を見て検討することとする。

学年が上がるにつれてほぼどの項目も得点の値が高くなっている。つまり、本校の教育の中で修得できる力であると言える。元々本校が開校時から提示していた方針では、本校の職業教育は職業的な力だけでなく社会人としての基礎的な力を育てることを教育の土台として取り組んできており、このような積み重ねがあつてこそ、この成果が生じたものと思われる。

「健康管理」については3年間で学びの成果が少ない。これは「健康管理」が家庭生活及び家庭の協力なしでは培われないところがあるためであると考えられる。しかし、「障がいの理解」、「障がい受容」、「自分の強みや弱み」については日々の指導の中で十分培われることであり、今後も職業自立や自立活動等の時間を通して学んでいくことが重要である。

「日常生活管理」においては3年間の学習の成果がしっかり現れている。ただし、生

活費や給料等のお金のこと、言葉遣いやマナーについては低い得点となっているので引き続き指導が必要である。効果的に指導するためにも教科間の連携を行い、基礎的・基本的な幅広い意味での学力を身に付けていく必要がある。

「対人スキル」についても3年間の学習の成果がしっかりと現れている。得点の低い部分については特別活動、職業自立、自立活動等においてエンカウンターやソーシャルスキル等の手法を用いながらコミュニケーション能力の向上を目指していく必要がある。

「基本的な労働習慣」についても3年間の学習の成果がしっかりと現れている。専門教科の中で学んだり、職業自立の中で学んだりすることが中心とはなるが、自分のもっている強みや弱みをしっかりと理解して働くためのより良い習慣をつけることがこれから必要になってくると思われる。

最後に「職業適性」についてであるが、ここでも3年生が高い得点を示している。この項目では職場において柔軟に対応できること、臨機応変に対応できることが必要な力となっている。ここにおいては本校の生徒にとって難しいところでもある。よって知的障がいをはじめとする本校生徒の特徴を企業側に啓発していく必要があると思われるが、一方で、できない時にどのような支援や対応をして欲しいのか自分で他者に伝えられる力をつけておく必要があり、ここでも幅広い意味での学力が必要となってくるものと思われる。

## 【まとめ】

### ①基本的な生活習慣の確立の重要性

- ・家庭への啓発⇒PTAの研修会等での啓発
- ・生活リズムを整えていくための手立て⇒生活調査の実施



### ②ライフスキルの向上

- ・自己理解、障がい理解についての一層の学び
  - ・コミュニケーションスキルの向上
  - ・客観的生徒の実態把握
- ⇒自立活動、職業自立、現場実習、総合的な探究の時間、特別活動の指導内容の充実

### ③働く意欲をもち社会的な自立を目指す生徒の育成

- ・自己肯定感を育てる学校生活
- ・幅広い意味での学力の伸長、考える力を育む授業づくり、わかるできるを実感できる授業づくり⇒教育課程の検討、年間指導計画の見直し（縦断的・横断的に教科目標及び内容を検討）、授業力向上

### ④移行支援計画等移行支援会議での情報提供の検討

- ・個別の移行支援計画及び支援会議の内容検討⇒本年度既に実施

### ⑤職員の専門性の向上

- ・職員研修の効果的な運用